

11. 家族・親族との関係

きょうだいの配偶者、あるいは、甥や姪には、ハンセン病療養所で暮らしている自分の存在がいまだに秘密にされている入所者の方が多い。長期にわたる隔離生活のあいだに、自分のちかしい肉親たちは死に絶えてしまった入所者もいる。家族・親族とは断絶したまま、音信不通になってしまった入所者もいる。《家族・親族との関係》の回復は、多くの入所者にとって、課題でありつづけている。

以下では、《家族・親族との関係》をめぐる聞き取りでの語り的一端を示していきたい。

ある入所者（男性、1940年栗生楽泉園入所）は、きょうだいはみんな自分のことを知っているが、配偶者や子どもたちに言えないきょうだいがおり、そのため、母親の葬式にも呼ばれなかったと語る。

〔きょうだいはみんな、おれのこと〕知ってるよ。だけど、いちばん末の野郎はさ、64だけどさ、子どもが3人もあって、おかみさんいるんだけどさ。そのおかみさんにはおれの話できねえって言ったよ。子どもにも言わねえんだと。だけど、おれとは年じゅう行きあってんだよ。しょっちゅう来るんだけどさ。「おめえ、自分のおっかあにもおれの病気のこと言えねえんか」ったら、「いまんとは、言えねえな。悪いけど勘弁してくれよ」なんて話してる。

〔母親が死んだときも〕もう、いま死ぬ、いま死ぬ、あと何時間しかもたんなんて、みんな教えてきてたよ。だけど、葬式は行かねえんだよ。「葬式は来ねえほうがいいから来んな」って言うから、行かねえ。

葬式には行きたかったけどさ、行かなかったんだな。行かなかったんじゃないで、行けなかったほうだな。呼んでくれなかった。「死んだけども、兄貴が来ねえほうが、楽だからな」。——そうは言わねえけどさ。言葉では言わねえけど、そうだと思うんだ、おれは。

ある入所者（男性、1944年栗生楽泉園入所）は、肉親とのつながりがまったく途絶えてしまった経緯について、つぎのように語った。

父はね、ここ〔＝栗生楽泉園〕へ、〔私が〕最初に入るときに来て、加島分館長と話をしたと。で、私が入ってすぐ、19年の10月だったか、〔もう一度面会に〕来て。で、翌年の20年の5月の8日の日だったですね、ここへ来て、「いや、東京は大変だ、空襲だ」って、そんな話をしておったです。それが最後だったです。父は忙しいのに、わざわざ、交通の便が悪い、こんな山の中へ来てくれるというのは、私は申し訳ない。父が、頭の帽子を脱いだときに、頭が真っ白になっていて。いや、これは申し訳ないという、そんな気持ちだったですね。いちばん、父が、心配、苦勞をしたと思います。申し訳ないと思っております。私は、もう来てもらわなくていいよ、と。ここへはもう来てほしいとは思わなかったです。来るどころじゃないと。そのあとしばらく、父から手紙が来なかったです。

母は、昭和24年の11月に死にました。これは父から手紙が来ましたから。

〔父については〕全然連絡もないし、おそらく死んだであろうと。そう思ってるだけです。——夢を見ましたけどね、〔昭和〕38年に。夜中に、白い装束の。父だったんじゃないかなあっていう。そんな夢を見たことなんか一度もないんだけど、そのときはどういふわけか、白い装束がばあっと浮かんできたのが、38年にあったですね。そのときに、父が死んだのかなあと、そう思ったです。それまで、そういう夢、見たことないんですけど。

〔姉と弟は、私がここに入所していることを〕知らない。知っとったら大変でしょう。これはもう、離婚になったでしょう、わかったら。〔いまでも〕知らないと思います。〔姉と弟とは音信は〕なしです、ずっと。私は、父に、「私は行方不明でもなんでもいい。そのようにしてください」と、20年の5月の8日の日に、ここに面会に来た父にそう言いましたから。父は、どうしましたか。私は空襲で死んだということにしましたか、それはわかりませんが。空襲で死んだっていうのが、いちばんいいと思いますけどね。

〔姉も弟も、私がここにいることについては〕知らないほうがいい。やはり、まだ差別があると思いますから、まだまだ。わかったら大変なことになると。みんなに迷惑かけるし、みんな、引け目を感じるんじゃないか。私が病气ってこと、ここに生きてることがわかれば、私の甥っ子か、そういうのが負い目を感じていくんじゃないかと。知らないほうがいいと思っております。

ある入所者（男性、1947年邑久光明園入所）は、実家から親が病气だという偽電報を打ってもらって帰省したことはあるが、実際に親が亡くなったときには葬式にも帰れなかったということ、つぎのように語った。

〔実際に親が亡くなったときは〕それは行かしてくれん。というのはもう、葬式になったらやね、やっぱり、村とか部落とか親戚とかいうなに来るからね。だからもう、死んでから通知があるだけでね。いついつに親が亡くなったということだけしかもう……。亡くなったから来いっていうことで行ったことは全然ないです。そやから、両親とも、死に目には会ってないですよ。

きょうだいによってね、なんていうんか、もうだいふ前からやけどね、自分の子どもを嫁がしたりなんかして、旦那とふたりになってからやね、旦那に〔ぼくのことを話して〕……。まあ、旦那かて、薄々わかってたんじゃないかなと思うけどね。で、そういうようななにでね、一部の家族では前から、子どもがおらんようになってからやね、手紙——手紙も偽名使うとるからなんやけど、電話もかけたりしとるけどね。一部の家族ではまだ、旦那とか嫁とか、自分らの子どもとかに、なんにも言うてないからね、隠してるからね。ま、隠してたって、隠しおおせてるんかどうかわかんないけどね。

ある入所者（男性、1948年栗生楽泉園入所）は、実の弟から「親とも文通するな」と言われて、家族とのつながりをいっさい失った体験について、つぎのように語った。

親きょうだいがどれだけ惨めな仕打ちを〔体験〕したかっていうことについて……。おれも弟がいるわけなんですよ。その弟とは、おれ、20歳（はたち）前に別れてるからね。そのころ、彼はもう、ソ満国境のほうへ行ってたわけ。満蒙開拓青少年義勇団ってやつで、終戦の年の春、むこうへ行ったわけよ。おれの弟は、ソ満国境のほうに、警備隊として行かされて、残ってた連中は全部南下しちゃって。で、おれの弟は、行ったっきりでもって、おいてけぼりくったわけだ。それがどういうふうにまわりまわってきたんだか知らんけれど、最後に生きていて、上海のほうから手紙がきて、うちへ。生きてたわ、ってことになって。おやじは喜んだ。そりゃあ喜ぶだろな。おれはもうこっち入っちゃってるんだし。それで、村長や親戚じゅうからみんな手紙をやるけれど、いっこうに、帰るって言わない。「最初のうちはちやほやするけれど、国へ帰ったって、慣れてくればおしまいよ」ってなこと言ってたらしい。で、「兄貴からはなんにも言ってこねえじゃねえか」って。おやじから、「おまえ、手紙書け」って。で、「おれは、とにかく、親の面倒みれない状態だから、おまえ、帰ってきて、親の面倒みてやってくれ。おれんちの財産はいくらもないけれど、財産はもちろん、おまえに、みんな一任するから。おれには権利はなんにもないということで、帰ってきて親に安心させてくれや」って言ったら、じゃあ帰ろうってことで、いちばん最後の引揚げ船で帰ってきたんですよ。〔昭和〕28年ごろかな。

弟も、満人だか支那人だかに拾われて、少し、じゃ、ご奉公、恩返しをしなければってということで、上海の病院かなんかでもって手伝ったらしいんだけどね。そこに、たまたま、日本の女性が、その彼女も、ひとりだけでいたらしくて。で、意気投合して結婚したんじゃないかな。むこうでもって、子どもつくって、引き揚げてきたんですよね。

弟は、上海にいたころは、おれと文通してたんだ、航空便で。「とにかく、兄貴の手紙を見たから、おれは帰る」ってこと、書いてきてくれたわけ。帰ってきたら、「もう、親とも文通するな」と。「兄貴の病気みたいなのを、うちからもう、二度と出さないんだから。だから、絶対、親とも文通するな」と。そんなこと言ったもんで、こんだ、おやじが怒っちゃって。弟のやろう、うちを出っちゃって。で、埼玉あたりへ行ったらしいんだよね。埼玉にいたころ、おれのおやじがときどき行ったらしいんだけれど。弟はどうとう、一回も手紙よこさねえ。兄貴はもうとにかく親とも文通するなって。

〔弟じしんが〕迫害を受けてるから、そういうことを身にしみてるわけさ。だから、二度と兄貴みたいな病気はうちから出さないぞと。兄貴は病気なんだと。彼は、医療関係の検査技師みたいなことやってるから。だから、おれから手紙もらっても、すぐ消毒するなり、焼却するなりしてしまえばいいわけだから。それぐらいのことはやりかねねえしね。やったろうし。それで、うちへ帰ってくると、こんどはそれできねえから、親とも文通するなど。そういうことらしい。いまだに来ねえんだがね。おれのほうからはやりようもないしね。

で、1,400万もらったって、これ、おれひとりの権利じゃないんでね。そういう迫害にあった弟のほうがかもつかわいそうだったかもしんないんだいね。国の教育っていうのは、ひどいもんだったんだなあと思う。恨んでも恨みきれねえよね、こういうの

は。で、いずれね、個人的に、他の人を介してだけれど、弟の状態を探ってみようと思ってるんです。親たちが死んだのも教えねえんだもん。おれのほうで調べてみたら、おやじもおふくろも死んでるんだいね。おやじは、80は過ぎてたと思う。おやじのほうがおふくろのほうで、平成になってから死んでるみたいだからね。

〔両親とは〕弟が帰ってきてからも文通はしてたんだけど。親はだんだんおれよりさきに年とるわけなんだから。いつまでも心配をかけていないほうがいいのかなあ、とも思ったし。それこそ自動車の免許取って2、3年ぐらいでもって、もし文通してるっていうと、おれも、車で行きたくなりゃ、そばまで行けるんだからね。車でさ。だけど、そんなことでむしろ心配かけるより、いつそのこと文通しないほうがいいかなあと思って。間違った考えだったけどね。弟の手前もあるだろうから。親がだんだんだんだん年とってきて、弟の世話になるよりしかたなくなるんだから。それでもまだおれと文通してたなんつったら、こんどは親たちの立場上うまくないだろうと。で、おれのほうからだんだんだんだん〔間遠になって〕。最初のうちは、「元気だっていうことだけでもいいからたまには手紙くれ」つって、おふくろ、泣いてよこしたけどね。だけど、それでもやらんほうがいいだろうと。

〔2人の妹とも、文通は〕ほとんどなし。これはみんな、嫁さんに行っちゃってるんだから、そんなことまでついたら、かえって、まずいだろうからね。むこうが困るだろうから。おれはもう、おれひとりだからいいさね。弟でさえも、おれが、「うちをついで親の面倒みてやってほしいんだ」つったら、「じゃあ帰る」つって帰ってきてくれたのに、そいつに対しても文通してねえんだからね、おれは。だから、ほかのきょうだいとは、もちろんやらない。

ある長期入所経験者（男性、1950年星塚敬愛園入所）は、兄弟とはまったくの絶縁状態になってしまったことについて、つぎのように語った。

〔父が亡くなってから〕もう30年越しましたよね。〔享年〕75歳だったから。〔だれも〕親の命日も教えてくれん。母の命日はね、1週間ぐらいしてから教えてくれたけど、父親の場合はね、それも教えてくれない。誰も、自分のきょうだいの連中も、教えてくれんで、新聞に、〇〇町の◎◎▽っていうひとが亡くなったと〔出ているのを見て〕、びっくりしちゃって。

その1週間ぐらい前に、親父の夢を見てね。病気が治って親父と抱き合ってる夢を見ました。これはもう、夢でね、よく見るんですよ。病気が治った夢、あるいは、自分が死んだ夢。それから、息子が病気になった夢。もう、いろんなね、いい夢はあんまりないけども、そういう夢。親父のね、いろんなことで迷っている夢を見ましたね。——そのあとでそういうもの〔＝新聞の死亡記事〕を見たから、“ああ、親父はやっぱり亡くなったんだな”と思って。何年前に町議会の副議長をしとった人が亡くなったと、新聞に出て。それで、ある人に電話をかけて——役場に自分の同級生がおりましたからね、〔その人に電話をかけて、確認したんです〕。もう30年前の話です。

母はね、それから4、5年たってからでしたね。77歳で、母は亡くなりましたからね。親父がそうだった〔＝まったく訃報の連絡がなかった〕から、「母が亡くなったときに

は、必ず知らせよ」と、弟たちに言うておきました。そしたら、〔葬式がすんで〕3日してから〔連絡があった〕。「3日したのは、なんでやったか？」と言ったら、「いや、あんたに知らせたんじゃ、葬儀に来るから、葬儀が済んでから知らせたんじゃ。兄貴、それは、わかってくれよ」と。うちの弟はね、県内で高校の校長しよったから。

だから、「兄貴、それは理解してくれにや困る。俺なんかの立場もあつとやからな」と。〔親の葬儀には〕みんな学校から〔教師たちが〕来ますよね。〔そこに、ハンセン病の私がいたのでは困る。〕「それを避けたかったためになにしたんじゃ。兄貴は、それくらいのことはわかるじゃろ。知らせることは知らせたじゃないか」と言うから、もうこれとケンカしよつても始まらんと思つてね。

みんながね、「おまえの兄貴は偉かったけども、ライ病にならんかったらよかつたのになあ」なんて言う。「兄貴はライ病で敬愛園にはいつとるじゃないか」と。悪いことをして刑務所に入っているよりか、まだ下ですよ、敬愛園に入っているっていうことは。それでね、勤めたかったら、当直——いまの時代とは違ひまして、学校の先生たちは、みんな、割り当てで、20人おつたら20人にね、割り当てで、2人ずつね、当直しよった。布団はね、当直の布団というのがありましてね、包布（ほうふ）だけをとりかえるような仕組み。〔しかし〕「当直したかったら、布団からなにかから〔自分で〕持って来い」と。その先生方みんながね、校長、教頭にね、申し出た。そういう問題がありました。〔弟も〕ひどいめに遭つたんですよ。

弟は、結婚も10年ぐらい遅れましてね。満州に兵隊でとられて、10年ぐらいシベリアに抑留されたんですよ。それで、将校になっておりましたから、ひどい折檻を受けた。で、30近くになってから帰つてきたわけです。学校には復職しましたが、そういうこと〔＝肉親にハンセン病者がいることへの差別〕が始まって、もう辞めるかどうか〔の瀬戸際まで追い詰められたんですよ〕。

それで、次男坊は、「そういうことがあつても、兄貴をなに〔＝粗略に扱うことは〕したくはないけども、兄貴のせいで、なんで、これだけね、いじめられないかんか」と。「それだったら、自分は、もう生まれ変わったつもりで、名前を変える」と。で、◎◎〔という名字〕の字を略字に変え、読み方も変えまして、そして、「◎◎〇〇とは私は関係ありません」という声明のようなことまでしましてね。「◎◎じゃ食べていけない。子どもも養つていけん。先生以外の職業にいまさら就くこともできんし」と。——それはね、もう偏見差別の最たるものですよ。そうせんと勤め〔を続け〕られなかつたんですよ。

〔その弟が〕跡をとつたんですよ。財産からなんからね、ほかの弟なんかにひとつもやらんで、全部ね、取つて、なに〔＝相続〕したんですよ。「それだけのことをしていながら、おまえ、どうしたことをしてくれた」。私が呼びつけても来ないから、手紙に書いてね、なにしてやったのよ。そしたら、「兄貴は兄貴の考え方があるだろう」と。

「私は私の考え方で◎◎家を継いだんだから。あんたはもう禁治産者ということになつてね、なにしたんだから〔黙つていてくれ〕」と。

法律にどうなつてゐるかは知らんけれども、〔ハンセン病で療養所に収容されると〕禁治産的なものになにされるんですよ。私は「財産は放棄せんぞ」と言つてね、なにしたことがあります。しかし、私の了解なしに、親父が死ぬ前にね、もう財産全部、

残らず独り占めに、家督を相続しておりました。そういうね、大（おい）それたことをしておきながら、もう少し、[人情] 味（み）のある方法をとってほしいと言ってね、だいぶんケンカしましたけれどね。[ぎゃくに]「身勝手な兄貴だ」と[非難されました]。

〔けっきょく、弟は、跡を継いだ家屋敷は〕全部処分して〔町に出ました〕。——その弟は、私よか先に死んでしまいましたけどね。

ある入所者（男性、1951年大島青松園入所）は、親の葬式に帰りたくても帰れなかったことについて、つぎのように語った。

〔私は〕バカみたいに、家族を守らなくちゃいかん、家族に迷惑をかけないようにしようって決めていました。だから、帰りたいていうの、やまやまだったよ、ホンネでは。だけど、だいいち家族が快く受け入れようとしない、ということもある。それもわかってた。両親がよく面会に来てたのは、“あんまり行かないと、戻ってくるかもしれん”というところが、あったんじゃないかというふうな感じがするのです。

そのときに、おふくろが言ったことは、「私も、もう年をとったんで、ひよっとしたら、いつ死ぬかもわからんけど、葬式には戻ってこんでもいいからな」って。母親が、何回となく、言ったね。けっきょく、「戻ってくるなよ」ということなんですよ。だから、両親の葬式にも、帰ることはやめました。

〔1996年に母親が亡くなったという知らせは〕すぐ来た。〔しかし、「帰ってくるな」ということを〕言外に言った。——兄貴から電話がかかってきて、「〔おふくろが〕死んだ。おまえ、葬式に帰るか？」という言い方だった。『帰るか？』ということは、帰ってくるなということかい？ 帰ってこいということかい？」「そのどちらでもない。おまえの気持ちは？」って言う。もう、ピンときたよね。みんな集まってくるでしょ、まわりも、親戚も。そこへ、やっぱり、後遺症のある顔をさらしてほしくないっていうのは、すぐ読み取れたから、「安心しろ。おれ、帰らない」って、そのときに言った。ほんとは帰りたいたい気持ち、やまやまだったけれども、おふくろが面会に来てたときに、そのときが来ることを予測して、「帰らなくてもいいよ」と、ずっと私に言い続けたこともあってね、きょうだいたちにはそのことは全然言わなかったけれども、「帰らないから安心しろ」って言ったのです。

それから、せめて墓参りにでもと思って、3年後に墓参りに帰った。そのときも、弟の嫁なんかが、あとから私のことを聞いて、ものすごいショックを受けてることを聞いてたし、生まれた家の横を素通りして墓地に行って、墓参りをした。そのときに、兄貴にだけは連絡しました。30センチくらい雪が積もってた日だった。兄貴は自転車を押して、その籠に長靴を入れて、「おまえは革靴だろう。こんな雪深いなかで濡れてしまうだろうから、長靴をもってきたから履け」って。けっきょく、兄貴の家に行って、飲んだり食ったりして帰ってきたんだけど。そのときに、兄貴が言ったことは、「おまえを、日ごろ、おれたちの家に喜んで迎えるということを、いままでしてこなかったけども、せめて、おまえが死んだときには、あの両親の墓をあけて、そこに、おまえの遺骨を入れてやるよ」と、ボソッとやった。それで、口論になった。「そんな気持ちがあるんなら、なんで、生きてるうちに、きょうでも、いまでも、家に帰って

こいと、なぜ言えんのか。おれが死んで、骨になって、ここへ入って、喜ぶと思ってるのかい。絶対、死んでも、ここには来ないぞ」って。

そういうことがあったのだけれども、だから、葬式には、いまでも帰れる状況にはない。私は、そう思ってる。だけど、兄貴は、「弟に、おれが死んだときには、ぜひ、〇〇〇を葬儀に参列させてくれって言ったんだ」って、言ってたけれど。

このことの背後には、長年にわたって、きょうだいが自分の配偶者には、この入所者の存在を「秘密」にしてきたという重い歴史があるようだ。

兄貴が結婚したときに、私のことを内密にして、結婚した。子どもができてから、話した。その女房が、「なぜ、そんな……。いま、普通の病気やのに」。よく知ってたらしい、勉強してて。「なぜ、最初から言ってくれなかったのか」と。「戸籍をみたら、あなたの弟がいた。弟のことをいっさい私に言わんから、ひょっとしたら、あなたが、犯罪を犯して、弟を殺したんじゃないかと私は思ってた。話さないから。だけど、そういうことだったのか。それだったら、なんで、結婚するときに、おれにはこういう弟がいるということを言ってくれなかったのか」って〔言われたらしい〕。

だけど、弟は、最後まで内緒にしてて。結婚して5年も6年も、もっとあとまで言わなかったのかな。ひょっと、なにかでわかって、それから大喧嘩になって、夫婦仲がおかしくなって、トラブル続きだったらしいのです。

私の妹もね、結婚するとき大変だったの。結婚話が決まって、日にちが決まって、結納をとりかわして、いよいよというときに、私のことがわかった。むこうがわの家族が、徹底的に、「どうも、わからん。なにしてるか、どこにいるかもわからんから調べよう」いうことで、親戚じゅう手分けをして徹底的に調べたら、ハンセン病にかかって、大島青松園に隔離をされてるということがわかったから、調べに行こうというので、大島青松園までやって来た。みんなで、ハンセン病の勉強したらしいのです。むこうの親戚がね。その結果、結婚に反対ということで破談にしたけれども、よく調べてみると、そういう根拠になりうる病気ではないと。いまはまったくなんの問題もない病気だということがわかったが、どうするか、ということになったのです。破談になった話が、調査の結果、もとに戻ったのです。これは、なにも反対する根拠にはならないということで、結婚を認めると。

ただ、そのときに条件がついたのは、生涯、療養所に入所中の兄貴には会ってはならないと。それを了解してくれるのであれば、親として認めると、条件を出されて、馬鹿みたいに、それを認めたのです、妹が。やっぱり、どうしても結婚したかったんだろう。いまだに、それ守ってるのです。兄貴には会わないということ。私は、バカじゃないかと思ってる。電話でも、手紙でも、会おうと思えばいつだって会えるのに……。私は「なぜか」っていうこと言わないけれどね。そういうことこそ、長兄がやるべきだと思ってるから。そういう事実が、まだ、頻繁にあるのが現実です。ハンセン病問題は、社会問題としてはまだまだ解決していない。